巴叱禹吟千勺注下

ヘ5
1872
2

周彩

へ5
1872
2

No. 5
1872
2

明治十四年十月十日
宮内省
御蔵書

第六

昭化

山島もしらぬ世ん月ぬ高根ぬ
大和物語ニ云雲のなかるゝに
鏡をみせられはわり新をこそ
啼ぬるとあり 後月のかゝ夏の
ふとくわりとこそしたりんといひ
まわり鏡と詞にあらはさは奇
和ぬるへきか唐乃古ましにしを也
ぬもとに霧乃はまやらぬ笠
各句の心大すなるまゝ付かゝ侍
ぬ花にはれらるゝ也
時雨をや秋の風れ送るゝ也 巴
又風の送る時雨なりて雪し晴ぬ
庭に落しく木葉いくしら此

花の比入ゆるこゝ又細源の地に
とめいるなり　花ちりし昔に
むし今にいまに志らしくなりぬ　おと
けしき風
的やすき月のゆくえ此ぬまれて同
月此入こを志らひ涙しさとゝめ也
まれるあふ夜のきぬくいらし　巳
心あらはなり
思ふ事にえきぬさりあるなるひ同
志の事に郭さきり故衣くも
いそかいしうるへ
杉やに志ゝかふ中　此あれさ此
親にかくす契なれさりうち也
蓮生も住いなれしとゝてまて同

未つむ花ちらこの家のいさめ思ふ此ハ
て蓮生此みやとうまいなちぬと
乃そむまも同心なりし也
ともになれぬる杉むしのこゝ思　巳
よもさこの宿も友となれぬるに
こゝろとも也
二
まちくて時よりけるれかゝ鶉　同
杉むしを友になれるなり
其所此いりの秋かせ乃くれ此
鶉なくさかの入口の濱風にとなり
立きゆる波の上に雪こかけて同
海の上に雪いさし濱風に立浪に
とゝめるなり
なりれいさゝ月の水上　巳

白雲生處有人家と見ゆるを
車とまりもみちぬのかけ　巴
停車坐愛楓林晩霜葉紅二月花
かわ田にもあるせきいまして詠みて同
田頭の水車や
秋花あしたのまゝのこえ河　此
すこしき河の田をかりたる詠
あらはれたるなり
棚橋の霜やきりまの春の月　同
たるなりしたるなとのやしはそと
志たる橋ん霜に霜まの月也
芦屋のおれみそ河とあれにたる
橋と付侍ぬ
志川の高をひたちかへる花　巴

こと取るなし
くれぬまに炭賣ふ急の在さより　同
ぬなし
きむくなりたる九重のうち　此
あらはなり
能ぬとて雪山のみきりにて　同
源氏の詞にも一とせ中宮のおまへ
小雪山川にて詠とあり雪山て
らるにふ足なれは寺くより
もちはこふ也　故のうちの宝風
に能るとも取くも能の雪山葉
形を此松そ花をりかくはし　巴
松の花をかくはしに雪山を能る
かとや

かたはかりわ木ゝうき梅の咲つゝき也
松はかくれゝるなる海へ
源谷いてゝやうくひすのなく 此
毛詩ニ出幽谷遷喬木
あくてかに聖はまつゝ御附日 同
不及注
かゝへかつくきゆゝうすゝひ 也
やわ句なり
三
くちぬる津田ひつちほの方は 同
落れのきてまにひつちかの御り
ゝるとや
そのかなしきの霜はふゝ忘 此
生まれちゝき花なりゝるや
孫兄せる曉月の草の底 同

あゝらなり
附りあへ海をなしくなりに星也
取り句なる海へ
一花の様は冬聖れ梅の是て 同
一花時にあひしも枯木にぬさるとも
蔵しかくれも雪ゝつきみち 此
仰なし
獣乃あとゝかつゝかわくし 同
蔵しくれはゝりゝる雪に獣
あゝられゝるなり
常にはみぬともし火のかけ也
ともし火なとして獣狩んと
橘とてはあやしき海の上にして 同
橘之乃文殊ハ東生に必誘灯

それはとこゝひ乃御法なり
入日はすゝ所をたるひくこす
雲いもの相も上神ゝ多やまゝ今
源氏乃はゝ奇なり入道の家
乃別を志こひ給ふし
あはれを雨のもよ同すそこき也
雲とまり雨とやまと云おもりけ
あくんと
源河あ心せたとうてわこゝや同
なみこの雨ゝ水のまきりこゝ也
あやれひとり其床乃ゝなく此
毎夜獨祢の床の源河まゝり
かゝしこゝ也
月にしも志ちはしかきかゝへ同

志ち乃まゝ祢ゝ百夜をかゝへ同
ゐにむなしくあいさりし獨祢也
けるかりけるかゝひちの露也
一切不付句なり
萬てよりはまにをしの時あり同
書にかゝ上庶のりなく時あしこゝ也
那人ゝ法こきて山ゝつき陰此
御なし
ちる花や浪茅ゝ夜の雲乃夕同
山源きかゝの花苞きて那人せん
あさちはあゝ如くゝ法さ也
かこゝ霞乃ねるのきひしき也
ゆりゐより
とゝ人乃ありゝに水夜日も志し同

同前

ほてもよいひ乃いはちいつまで此
老ぞ身とはとひなくさむ
ぶんもなけまい孫永日なり
なり我すとに命ぞうりなへ
君が代とあまたまてけるへき尚
忠仁公陽成　光孝　宇多
醍醐に仕給しも命なり
ては敷代と經かたうへし
これむしきさに神そ成り也
紫色に位階と一入とや
月なりし花の菜いらかしきて同
くれなし
あまたる宿に露乃ゆ枕　此

蕉屋さ見ら菜とも月とも
枕なるへし
園の戸も雲なれはかゝるまひ同
あまたるは野分の頃あしして
孫やの戸もかこふきけれさる也
こゝもかしこも板まかちなり也
雲なのうちは園の陰ありなり
梯いすゑ緩くよ浪さして同
くちたる橋の板まより　水のこ
ゆる形なへし
おくもさくらはかつら我乃山化
梯にかつき常はなるれは浪こ
えてもあるにつけて桜花と思ひ
よわ侍り

かくれなし

かすむ野原はあらぬ友なひ同
あけ白の柳なり

第七　絵色

明て月をちかた野人に山も明
月明白なるゆへ春にをしみえん
しの明てゆくなるさるとも
遠方野辺古語也
かへ海やいけこさ波しの春此
野人のいつくもしにみてさるの河
くのまへ鳴るとしかれと明ぬて
野人よりしまへ庚のとなり
前の二は萩も萩もうら枯て同
萩萩の盛の比は立別さる庚の
秋も末に成てしゑをくなり
しるときていひかけたり
うはかにあらき野なしてなり色

いくしむらひ火とつけて鐵
とや夫ころし給しや其言ハ
小三世とくらくのあり拾ふ
未来人あるましきなや
西三年まつかた山畑ハ里かけて同
前句にこゝくし夫句辨ゐ句
なれハ不及力書乃山畑燒ハ
かるゝは雨とまちて燒也むらひ
火乃あやし里かけくなと聖より
むらひのんあらうるん
かそれたまれも給ふ来橋也
の者ての同に橋にむ侍ぬ
月に相光ひつくひやこほるん同
やしけるまゝや

二

衣手きむ三法ふあつ夫此
曉起に汲なれたるあれ水東
毎に出まきるや
獨祢にいさとは夏れき風に同
しまふに夢に付ましけりひとり
祢のさ東ゆきくんとけてといねぬ
夏なるへし
おもふを垂し旅のうれしき也
いけうきてうへわ那れたちるん同
あるやりなり
こゝんゆくゑ者は給庶路此
東宮乃ゐ天子は代に二度立
給ふり無官ゝちかりけるを
いむやその者に二度京のまゝ

おとしれ本作ほはりしるせ
秋乃月雪かとみしに詠りわ 同
東明ぬるしに月の雪に詠なく落雨
のこせ詠りに桂しろ作ほ出けき
露也
みきりれ吉砂ぬむ皆乃をとと也
夜明千句の一如し
詠すしも雲れ上へおいわて同
紫庭し女人出けきんも
これ為所乃神若あもけれ此
於禁中それくの亞乃所あり
物いこれ作しつきてやこのるん同
迦毗羅衛國中に有桃丑甚下有
一丈鬼王号物忌其鬼王過他

鬼神不奇爰大鬼神王拵新
利益六趣有情實吾名号者
若人宅物怪屢現悪夢頻示
可蒙諸凶害之時臨其日書吾
名立門其故他鬼神不令来入
書吾名令持人如新可守護儀
軌内宿外宿とて外の事ゆきと
不知用也 於略之 けに末々れ要り
内乃は物いこれ作しつきていとなり
為きふしひ詠を大とのいこそ
と物ほしくり清むすこ乃
君くらたこのはとれ井所の
文法のつをつとあ詠とあり
鬼乃心をきつかあ中 表也

物忌と云鬼也前句注にて明也。
鬼神なと云テ奇特なるゆへ
道にたゞ鈴なる志け来れ任弱山同
役行者任弱山にて鬼をとられ
けり鬼社と云寺ニ今鈴まり
こゝ鬼乃子孫大峯に鈴禅鬼云
蔵てきくらんとそくとれいろ此
ちりて咲とのるゝ志けきなれ
蔵てい咲くさも蔵さるゝ花の人
名よ如くるゝ
ゆく鈴かけ子孫やうとむ同
蔵る様のうすゝる物のきし称
のいたりれとまり又とまけるも
ゆくとく流ゆくも

田かへすかくのはくこ とそ清くて
悦清くすいよとむて
なるむら此末葉まつふまもて同
地のまこ云也
まうれゆゑ那へいうす雪の比此
人家を所いうと雪いろのるゝ
夏乃夜の月やけきまて鈴なる同
けさ此月乃雪こすうるゝ
山乃あなくふなく目とくまれ
月の鈴るこのあるとにて明也
あふ坂や杉むら少年陰くるゝ同
蔵の実乃こゝあるとも名高にある
なあ所くとゝあるゝ
をと志川まれる秋の末なし此

をみを志るしとあやまりき
しるをそのまゝ三のまゝ用ひり
往来してたゞ五月雨のうち己
五月雨に沖田乃和そ河のみをて
しみぬもふる夜志るしまりけり
なとゝよりし
蔵りそふ草此宅さし此陰さひ同
かくれなし
かきひつ夏乃夕の国のいろ此
小夜の衣のさまゆふかはかくれる神
月のなりこゝろぬるの里に志るへ あまや同
志ほへあまやに月よりうるを意
折わくすを方人の神をよこつ此
小志ろきりメりのいれ

霧はらひつかへ御されそて 己
すてゐし
ウ くゐまてあかぬ小鷹にかつらひ同
源氏物語乃詞はわすりかはと
俗云にいつる詞し
ゑふいつちりまくらはくさん 田
やりるなり
ゝさかれるまたつすはあやしや此
天一神のまをにたゝふるとゝるを
はあしかんとしかふいつまく
かゝをしつて相とさくさんし
君しそに一夜すりの神ときけ
なにあふすれかくたゝふん
えもまゝわをこのむ中河同

第八

瀬々に小すむ新いに清まる雲の月 昆比

淑毎りうけ川まとる月何と

雲の月ともわ身かくしこそ

さ〻一乃月まてあるにとも

吹志川まわる波乃秋かせ也

波風志つにて志り月水底

もわ形しやしあるとも

色くの葉に水に落葉て同

落葉に清まて風も志川かに如し

山あらに形るすゑ乃かけはし比

落葉乃坂柿あらはれり

引すつるあらしの雲の消ぬり同

雲乃かけてしたるくし

すゑれをまけはあれ雪れ ちる也

雲乃消ぬる雲より雪の花

京氣也

むら竹若形を紙をこ方より同

やり句也

おとろかさしや祿くるくし比

形ちくなひ身竹に学ぬる

あくに流れもくらき霞より同

ゆてもくらきより学れ祿了

出ぬをおとろかさしとりまり

喜乃よ舟を川なく川岸也

くら青まる又ぬるくも

ほのか形る月にして波のまゝひ同

月を永とひ入まゝ

尾花かすゑとわくに流り風比

[illegible]れ乃渡し

霧ふりしもいつかわ夜志かれきて同
初鳥なり秋し尾花を来なまく風
狩人の夜志わるへ身ゆしきて家の
縁談し

みやこ此人の神りゑ色あく也
初鳥かりにむらる神なり
待くて今ふあふさる此開むへ同
実入人のいやけまとらとし
あまくの弱を引はるゝ道此
開むへを弱むへに成なしより
十五日信濃乃勅旨牧るを六年
辺まる七十七日甲斐廿日武蔵
廿三日信濃廿八日上野

里ちゝ夜まへ乃川を明まくり同
河水の弱なりいるゝ心なるべきし
津ゝ色なりれ乃小田の来く也
雨いるゝ柳かくれよ花くちて同
前るいかくまとなしくちくる花
乃清ゝきて海ゝ心し
清まぬすゝれそ霧此庭なる此
橘柳しくるもみまと雨はの為
に色くちぬへきし

春の雪とあ如ある雨くれとゝん同
四辺すゝれると咲とも分入て
みゝ人なきし

おとろふる男乃ゆく急かなしも也
いまけなれ此異やくるいまし同

妻句かくれなし

きえし　都もやゝ明かたの門此
たまゝ人の門をいそ夜あけて
初雪と異しぬこゝろそとも
月ようと紀別けそれ乃鐘の夢同
度こかしの蓄と雲わるゝ人
あらはけそうかるゝんと有ひ
しるも次第くる明日此給也
金雨よも秋乃風やこゝみ雪也
誰も秋よりかせとこゝろんも
一切不付一卿ん
志蓄ハふ栖ハ山のてゝ雪て同
ゝりそにも秋ゝせよとこゝ来を
みんとも古付合なり

道は夜里ぬ御ふ川くきの畏此
山乃てゝ雪ていに雪のてゝて
蓄ゝつんなゝいしゝる雪しゝつ
く夜乃畏此やゝくとあり
ウ きりくす鳴蓄ときけは通ってる同
きりくを鳴蓄きひしく思ひ
霧くゝを過ってるも　水ゝ起
乃をゝ此淺茅乃きりくす
霜若ゝりゝや起きむなるもん
なれはしん　其所となれる記也
ぞんぬまは那此夢乃なまくる同
前句やりゝ也那のうちと異ひ
しにけめてゝ那と中とも
一よぬゝ絶此ゝひ乃かくし夜此

しきもれかけしきの也
もろ海ゝ磨いいくつゝ乃ゝ之同
小風乃いけしきにもかへさといそ
くかわなるへし
勇ひとゝわいあしかゝるゝ藤えて也
神ありかさ物ゝ霜乃きむしゝ乃同
前句に對しくる付やしなり
霜乃きむさに藤えしくるとも

第九

菊乃香いうはまてつもれ雪の庭　紹邑
菊のかおりゝ雪ゝみるやとも
不香花と雪といへるなり
かきゝ乃本ゝ落ちかけ昆
ねち物ゝこの葉にて雪つもりて
りけに咲くるきくの香といふ
みそと申知しくり
者きゝ酒ゝ此意明ゝ至れ風ゝ経て同
梢の葉にあり明の新ねち物り
くると付侍り
入江なと浅ゝ舟乃ゆくゝ遊也
四句目ふりも
一むゝ乃烟の東北晴まくる里同

ひら我みよ文はあらす我ん同
こ乃文人こうへと云人はひら我
みらきよ人こうへぬに詞は聖
ぬ一我物となり中文のうち也
法乃はたへもなほあとのこゝ也
佛法相傳乃書籍も多き說り
こせんかこゝろおそひらきみと也
一枝乃花は妙形の文にして同
梵天問佛經に云佛灵山にイニス
時梵天金婆に羅花ヲ捧ル佛
拈テ衆ニシメス迦葉一人破顏巖咲ス
佛ノ言ク我ニ有リ正法眼義无相
法門付ニ属ス摩訶迦葉ニ
書とまつしら梅咲にけるも此

早梅乃詩は前村深雪中昨
夜一枝開
うくひすやこれ里よりもあすも同
一枝の梅に啼れめくるさと也
聖人との面乃山ゆまちりさ也
門かこふ竹に霊ぬのふりとなり同
かくれなし
冬田乃かすゑ志はれもてけ此
冬田のこりくるをかこひし
手にあらはれみこれて思のもの
久志かれそ也
二
清しうはる汀の夕日色消て同
ゆ宵の物りつる雅にかまのいろ
なるもしり日乾きてくるく

みちぬ神なり

小篠ふきなれは旅乃中宿 此
篠ふきなとして一夜の中
宿も弱引いてし 詠ハ屋重
りつへきもや

一夜かる枕かなし 夜雨乃音同
さゝ姫きに旅ゐして面を掩
かゝしも袖を露よぬるかり 巳
ふいまは お花の末に月出て 同
尾花の袖ゝ人なり
う清ゝ花床もあらハ海を此
ふいるゝおとろき立ゝる也
姫のなまれ聲への秋の世吹をり 同
夕ゆまハ聲への秋風の音より 琴見

く海まで志ろ夢伏見江乃水 巳
源草聲風ゝ志ろ夢也
ゆしよする小舟ハ千里ゆけ 同
ゆしゝ見のさとも
いくゝひりかゝ家なかり 此
里ちゝ花ゆへ方をゆきゝも
笛乃音ゝ遠さかりしもかゝくゝ 同
いろもの付合也
おまもろこしゝ此舞ゝ志ゝ海 巳
こゝ簾笛といへり 音図の舞出
まは入ゝ心
咲花乃梢をあやゝ錦ふく 同
唐綾高簾錦のことくなる也
やいなしくて二ある中のやし

世中にいとゝ物かなかにもなりにすす
人のくちにて物さかれかれ
物乃筆此物はまくまゝ名筆也同
口はなるさい物のまゝ此雖と名筆
出て恨出添しも
ぬきあきれ心みたけ里也
物乃筆のんあきはいゝ名筆出
こゝろも
ぞしく住庵も山乃かたりかた同
世種人のこころ思くあるゝ也
松をいしられかけ乃あもねき此
石階松柱竹編墻ト樂天作より
乖あり流戸作しい雪にかたしてきは
樂天詩にて付侍り松をいしら

竹乃あまたし雪はもりて傾く
亀しくや
あらしの音もさもむし詩月也
秋乃夜も見はくといなきこ夜は
長夜も笑ていみつゝぬとし
立かへりて乃枕勇にしむ此
人乃もとより東ふく別来て
けきの名物乃侍夜にも見
いやと枕りしられ此みさぬ夜を
ぬきをける衣の音ふるゝ重ね
この付様にといふ人の別
はる詩乃ことに心を用へ
とり勇ふしむいぬきとの
まし衣とかさしきさねて

第十　昌此

薄雪乃下ゆく松のあらし此
ぬらくはもりなのは松の風とも
うぼミりつつさにうすくと
ふりたる雪にて風乃を吹
絶ゆは雪の下をあらしゆる
ゆくよといひたてしり
月すめは四方れら夫雲ろうに
きえて三山かくれをゆく風かな
行風この体りや
こゝろぬとも雲起池水也
下り名の者にこゝろぬとし
鷺鴨乃さりくらは風の床かへ同
古風なく一句付抜し千句第

十なれてし
松あつ夫乃月やすまん此
不及は
鐘のしるかそくはくすもち夜より同
度々此の日の東出もる暁方
乃月沈まとり鐘さや
なれなりさ夜のさまも
目ゑす雲へのかくしこの雲也
鐘の者りそくても明やぬ夜の
かくしきとし
夜ゆにとちの山かせ吹ねらて同
うくれなし
春ともわぬ宿乃胡戸出此
鶴戸むる山風吹きて春とも

露とは神なりすゝなく蓄此
衣乃玉と露の玉に如何しか
麓とまれあけられて月の
ひかりあきらかに神の露に
うはりくるなり
ウ 萩乃戸の内まて枝のみたれ入日
すゝれと其あけられて刈萩
乃枝の扉はらちまてこゝ
入て神に露のをはらるゝ萩の
戸樹中にあり
志はまりにしも又姫なかれ也
なく出れしゝ逸にも見て同
二句ともにきこゝ
いくへいり里の霰此ぬるらん此

あらいなわ
うたふ夜も更わたりたる柳葉青
神楽也柳葉にいくへの霰の更
てをくらんや あなさやけあな
おもしろと みゆるとゝ柳葉
小霰のなく謹
くむさかつ夷此かけさゆる神也
神楽には必酒とのむも おなじ
柳葉子冷しきものゝ所には酒
なれ神楽とかきり
みちぬへき年此来く賀て同
賀の事なるゝとゝあり年
後の此こゝへきゆく来を飲
て賀をとり おこなふ也 淳和

天皇一ゝ七二年十一月辛亥
太上天皇五八ゝ御ノ齢五八
四十也
杖もゆるさん九重乃うち此
論語ニ五十ニ杖家六十ニ杖郷
七十ニ杖国八十ニ杖朝八十ニ
成ぬまゝ朝庭にも杖をゆる
けるゝ年也
方乃罪もいひなしに杖ゝ時同
讒言此はゝたきれてうゝ
海へ身杖ともゆるさ海なり
刑罪乃浅源によりて杖乃
数多少あり
あゝし我名此ゝんかなしき也

いひなし故あゝ名やゝんとも
はまなれは思ひ消ての夕烟同
おもひきて煙と成るわ
名此ゝらのわゝんとも
とわあつむるもかつしなれ文此
度くさはくし書る文一変
書かつしなくうへされる文を
とわあつて今いまやとはまを
なれは思ひよりわ文を焼う
しなふなり
川ゝへきく親乃氣よそふ海同
橋姫乃其に弁とて柏木乃
めれとの女あり柏木の出あつ
絶給へ家文書を代かとぬいて

入給しを弁乃君まわらて
給へる様神をかかるへくらるに
吉実乃おやに柏木にてあると
知給へるも如三の家此法かて
そなかるまし文ともも
り所有かけ乃まへをえさらぬ也
傳安よみぬ釈の新前なるは
こちさりかたれとも
三
おりしまの折にまちうれ花落也同
桐乃まへなる花の葉なるけも
なほ志こふんも
素かせとく深浪乃澄殿此
澄殿のおりしまも泉殿なり
素風乃吹とく深浪いさ船ら

花乃落くるなるへし
大津乃池も晴ゆくあき霞同
大荒木の澄に付なし傳也
澄乃素に絶て久し俗の奇
素風に霧もいれくるも
かすか船わけるよりの白雪也
うらに想へる竹の末葉此落を同
何のんも船し
色すりかたらるそのる秋草此
赤乃葉の露秋草におち
かゝりてかくるる神也
虫此素もいくをる魚此みそれ同
多にかくるとあるにより魚の
みそれと付傳し秋草の中に

伏見翁事
元亨釈書第十五云不知
何許人或人云従生来菅
州平城菅原寺側翁三年不
起又不言人呼為唖者時に
挙首見東方天平八年行
基法師迎婆羅門僧菩提
於菅原寺設供二人甚歓
乃執着為相板二比丘手舞
歌曰時或与縁親者三人相
共舞如故旧為蓋須臾作唖
然者為翁北言也時撞頭
望東者見東大寺営構也

其臥所自翁之居名臥見翁
因而名翁季
しもの葉はさかゆるも獨ころ也
老者は独ものゝけもなきか
云あはれ 別によし
こゝろまよひつはなせとれとも吐
人のしものそれはかの我松
おかくいやまなみすくとよし
使さんへ御 むかしの中よし日
はまあさ人の使するかる
きにいきんや母ひとり人のん
中いかりけと使の母子でも
いなせを使乃きてかしてと
ともさくもいひかなさぬし

Ms. Or. 134